

2020年6月NHK九州沖縄地方放送番組審議会

6月のNHK九州沖縄地方放送番組審議会は、18日（木）、NHK福岡拠点放送局（ウェブ開催）において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、6月7日（日）に放送した「これでわかった！世界のいま」の内容について報告があった。次に、事前に視聴した「緊急特番 新型コロナ 第2波 の衝撃 ～いま北九州で何が～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、7月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	山元 紀子	（霧島高原ビール株式会社 代表取締役）
副委員長	富田 めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
委員	秋本 順子	（金属造形作家）
	乾 眞寛	（福岡大学 スポーツ科学部 教授）
	大鋸 あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン株式会社 取締役放送部長）
	楠田 喜隆	（株式会社 雲仙きのこ本舗 常務取締役）
	籠田 淳子	（有限会社 ゼムケンサービス 代表取締役）
	関西 剛康	（南九州大学 環境園芸学部 教授）
	田川 大介	（株式会社 西日本新聞社 編集局総務）
	古荘 貴敏	（株式会社 古荘本店 代表取締役社長）

（主な発言）

<「緊急特番 新型コロナ “第2波” の衝撃～いま北九州で何が～」

（総合 6月5日（金）放送）について>

- 「第2波の真ただ中にいる」という北橋健治北九州市長のことばから始まる番組は、緊急性を感じ、非常に引き込まれた。80歳の男性からどのように感染が広がったかという実態は非常にわかりやすく、十分な対策をしていた救急隊員ですら新型コロナウイルスに感染していたという再現シーンは、驚きと恐怖に襲われた。見過ごされた感染者がいる現実や、厳しい現状に対応する医療従事者の姿を知ることができた。無症状の人からの感染も起きているということを知り、毎日の生活の中で新型コロナウイルスに対する姿勢が緩んできたということを感じた。ウイルスの遺伝子検査には非常に期待を持ったが、まだまだ時間がかかるということを知り、改めて考えさせられた。

- 北九州市の感染者数が急激に増えたことには、非常に衝撃を受けた。救急患者の搬送により、相当の感染対策をしている救急隊員でも感染しているということに、このウイルスの感染力の強さを改めて感じた。また院内感染ということには、病院内で不手際やミスがあったのかというマイナスに捉えるイメージがあったが、院内感染というのはどこにでも起こりうるし、ものすごい速さで感染が広がるということを認識した。全国向けの放送が翌日の深夜に総合テレビであったが、もう少し見やすい時間帯で放送して全国のみなさんにもこのことを知ってほしいと思った。
- 次々に発表される感染者の状況やその分布が、図に丁寧にまとめられ可視化されており、とてもわかりやすかった。データに基づいて伝えられており説得力もあった。感染経路がたどれない人の図はとてもわかりやすかったが、全体から医療機関や介護施設を除いた残りを、学校とその他2つのグループをまとめて記載していたが、その他のグループはまとめるのではなくそれぞれの割合を出したほうがよかったと思った。また、70代の女性を例に、見過ごされた患者によって市中感染が広まった可能性があるとは指摘していたが、どの程度同じような患者がいたのか、ほかにどのようなパターンの患者がいたのか、もう少し知りたいと思った。消防隊員はしっかりと対策を取っていたということだが、再現VTRでは医療用ではなく普通のサージカルマスクをしており、完全な対策を取っているようには見えなかった。番組の後半で、感染源が不明な人の遺伝子の分析が進んでいるというところはなるほどと思った。感染経路の推定ができれば、予防や行動制限ができるので、結果が待ち遠しいと思った。番組の最後で記者会見の中継映像が使われていたのも生放送ならではだと思った。

(NHK側)

消防隊員の再現VTRで、N95マスクではなく、サージカルマスクを使っていたという点だが、当時の消防署のマニュアルでは手動の酸素器具を扱うときはサージカルマスクでよいとなっており、今回救急車内で感染が起こったことを受けて、N95マスクを使うように改定された。当時はマニュアルがそのようになっており、それがひとつの改善点として浮かび上がったということはあると思う。

- 小学校や病院、介護施設での感染ルートを、日ごとの時系列で解説しており、わかりやすかった。また、救急隊員の再現VTRでも、エアロゾル感染した経緯が伝えられており、ここまで対策をしても、なお感染したというのであれば、もはややむを得な

い面もあるのではないかと思った。イラストについてだが、北九州というエリアの所在地が、何となく福岡県の東側と把握するぐらいで、実際にどこからどこまでが北九州なのか、また、院内感染が起こっているのは、北九州市内のどの場所なのかがわからなかった。スタジオのフリップでも、病院や学校などの施設のイラストがあったが、もう少し詳細な発生エリアについて説明があれば、よりわかりやすかったと感じた。北橋市長のへ取材については、自治体のトップが、この事実をどのように捉えて対策をしているのか、学校や地域医療について視聴者が気になっていることを質問して、回答を引き出していた。このような有事の際に、自治体のトップがどこまでの権限があるのか、どのような判断で動いているのか、専門家や厚生労働省のクラスター対策班などどのような連携をしていたのかということについても、今後検証してほしいと思った。

(NHK側)

北九州のイラストだが、所在地が福岡県のどのあたりに位置するのか、もう少し広範囲のところから伝えた方がよかった。また北九州の何区で起きたのかや、学校などの所在地についても、特定されない範囲でももう少し詳細な情報を出してもよかったかもしれない。

- 第2波という言葉は、菅官房長官が第2波ではないと発言した一方で、北九州市長が第2波の真ただ中という発信をしており、どうなっているのかという気持ちが残っていた。第2波について、もう少し追及があればと思った。また番組では、4月30日から5月23日まで23日間感染者がゼロだったということだが、北九州で感染が広がったのはなぜかということよりも、その時になぜ感染者がゼロだったのかということが大事なのではないかと思う。番組の中で感染が拡大した理由として、人出の増加や医療機関の検査が増えたこと、濃厚接触者全員を検査したことを伝えていたが、そもそもなぜそれまでは検査ができなかったのかということが疑問に残った。また北橋市長にインタビューする場所について、もう少し明るいところで撮ってもらいたかった。

(NHK側)

第2波ということばの取り扱いについては、当時、国と北九州市が言っていることが異なっている状況の中で、番組においては、「第2波」だとコメントでは明言していないが、タイトルに「“第2波”」と記載し、“いわゆる”第2波という形で扱った。また、取材をしていく中で、5月の大型連休中に熱を出している人が数

人いたという情報も含めて、なぜゼロになったように見えたのかというところも、より深く分析すべきだったと思う。

- タイムリーな番組だった。感心したのが、遺伝子情報を分析し、どこから来たウイルスの型かを調べることで、国内のどの場所で感染が発生したウイルスなのか特定できるということは新しい情報だと思った。また専門家が、リスクをゼロにできないということや、今後も感染対策をしていかなければいけないということを伝えていたので、視聴者の機運も高まっていくと思った。最後の廣瀬雄大アナウンサーの一言には、心が救われて、今後の感染防止策をしっかりとやっていこうという気持ちをかき立てられた。
- 冒頭で感染拡大の実態に迫ると、番組のねらいを説明しており、医療機関や学校におけるクラスター発生の背景や要因をわかりやすく解説していた。無症状のまま感染を広げてしまう怖さ、病院を除くと75%の感染者がウイルスの感染経路が分からないという特性、第2波はいつ、どこでも起こり得るということなど、説得力を持って伝えていた。時宜にかなった地域発の番組だったと思う。関心を持ったのは、北九州市が分析した感染ルートを明らかにしていたことである。例えば、80代の患者から14人のスタッフに感染したということなどをありのままに伝えていた。わかりやすく、記録性という意味ではとても意義があることだと思った。一方で、関係者や家族など、わかる人には、誰からこれだけ感染が広がったのかという人物が特定されてしまう。そのことによって、相当つらい思いをしたり、苦しい立場に置かれたりした方もいるのではないかと思った。公益性と当事者の気持ちやプライバシー、この両者のバランスをどう考えるかについて局内でどのような議論があったのか知りたいと思った。また、沖縄中部病院の高山義浩医師が語っていた、リスクをゼロにするのは困難であり、感染した人を決して非難することなく、周りが支えることが大切であるというコメントがあった。この指摘は極めて重要で、感染することは残念だが決して悪いことではない。私たちが心すべきこととして、より強調されてよかったのではないかと思った。

(NHK側)

公益性と当事者のプライバシーは非常に難しい問題である。ニュースで報じた、例えば、ある患者から16人へ感染が広がったという事実を伝えるときに、どうしても本人やその家族は、こんなに多くの人に感染したのかと心を痛めると思う。番組では、感染した人が悪いのではなくて、感染伝ぱ力の強さや感染を防ぐ手だてを考える上で、ある人から広がったという事実を伝えなく

てはならない。今も答えが出ているわけではないが、公益性だけでなく、プライバシーに配慮しながらも、対策となるような情報は、伝えていかななくてはならないと感じている。

- 番組の冒頭、北橋市長の第2波の真ただ中ということばから始まって、その後、これから放送する番組の要点がわかりやすく説明されていた。奇抜な効果などに頼らずに、非常に冷静だったため、好感が持てた。また、廣瀬アナウンサーも、大変落ち着いた口調で伝えるべき情報を分かりやすく伝えることに徹しており、番組の最後にしっかりと思いを伝えるところがよかったと思う。番組を通して感じたのが、視覚的な表現が的確に整理されており、伝わりやすかったという点だ。独自に分析したという手書きのホワイトボードのツリーは大変感動した。また、それを情報整理するのに使い、そこから放送用にデザインしていた。例えば、感染者のグラフや、地図、医療機関での感染経路の関係図なども、患者、スタッフ、救急隊員と色分けをしており、非常にわかりやすく見やすかった。オンラインのインタビューは、映像と音声は合っていないで、聞き取りにくいというときがあるが、専門家のコメントではしっかりと字幕が入っており、内容が頭に入ってきた。番組では、冷静に大切なことを視聴者目線に立ちわかりやすく伝えていた。情報がしっかりと整理されて、小さな工夫が視覚的にも凝らされており、とてもよかったと思う。
- 第2波はどこでも起こり得るというメッセージが、具体的な根拠とともに明確に示されていて、非常によかったと思う。特に集団感染が発生した様子を、感染ツリーで明確に示した部分や、救急隊員へのエアロゾルによる感染の恐ろしさを、再現VTRで示したところなどは大変わかりやすかったと感じた。また、自治体トップの北橋市長のインタビューの内容が非常によかったと思う。先行して第2波が発生した北九州市の事例を、全国で共有して、今後の対策に生かそうという姿勢もすばらしいと感じた。気になった点は、番組内では結果が出ていなかった遺伝子分析によるウイルスの型についてだが、大体いつ頃にどのような形で、結果が示されるのか、その予定だけでも伝えていけばよかった。一人一人が、自分が無症状感染者かもしれないと思い、十分注意して生活していかなければならないという危機感は十二分に伝わったが、今後経済的な復興もあわせて目指さなければならないことを考えると、今は無理にしても、このような条件が満たされれば少しずつ街に出ましようなど、未来に向けた前向きなメッセージがもあってもよかったのではないかと思った。

(NHK側)

遺伝子分析の型の結果がいつ頃判明するかについては、まだ具体的な情報はない。対策としては非常に有効なものになり得るの

で、わかりしだい伝えていきたいと思う。

- この番組を通して、改めて新型コロナウイルスとは何かということや、ウイルスの性質を新しい生活の中で知っていく必要性というものを視聴者に伝えていたと思う。また学校での感染というのが、重要な問題だったと思う。全国の教育の現場に衝撃が走ったのではないだろうか。今後のレポートに期待したい。

(NHK側)

最も大きいクラスターが発生した小学校では、今日から分散登校を再開した。どのようにすれば子どもたちが安心・安全な教育を受けられるかということ、取材班が少しずつ学校と関係をつくり、学校が元どおりになるまで取材できないかと考えている。今後も学校の取り組みや、教育委員会や保護者にとっての課題などもしっかりと丁寧に見つめていきたいと思っている。委員からいただいた貴重な意見や感想は取材チームにフィードバックして、今後の番組作りに生かしていきたい。

<放送番組一般について>

- 5月22日(金)の実感ドドド!「新型コロナ 見えてきた教訓と九州沖縄のこれから」を見た。九州沖縄各県でどのようなことが起きているのか、さまざまな対応について改めて知ることができた。番組の冒頭では、北九州市の病院でなぜ院内クラスターが起きたのか、当時の状況について医療現場への取材がよくされていたと思う。また、医療従事者への風評被害についても事実をしっかりと報道しており、その当時の苦難がよく伝わってきた。長崎県においては、4月に入港してきたクルーズ船について取り上げられていた。実際に船内で新型コロナウイルスの感染が発生した当初は、長崎県内や市内でも一気に不安が広がったが、長崎県がどのような対策を講じたのか、詳しい内容を県のコロナ対策チームのコメントを入れながら解説をしていたことが非常によかった。また、地域経済や観光についても、宮崎県の「ニシタチ」、熊本県の天草、沖縄県の観光業の現状について、九州沖縄のNHK各局が取材をしており、九州沖縄の一体感を感じることができた。また、イラストや専門家の解説がわかりやすく納得できた。
- 5月31日(日)のきんくる～沖縄金曜クルーズ「首里城再建への道のりは～火災から半年～」(総合 後1:05～1:30)を見た。2度と燃える首里城を見たくないという県民の強い思いがあり、防火対策がしっかり確立されないと再建は難しいという、

有識者会議の高良倉吉委員長のことばが紹介されていた。火災だけではなく、台風や地震など、さまざまな可能性を考慮しての再建になると思うが、これは首里城だけではなく、全国の文化財建造物の防災のあり方も問われていると思った。番組後半で、記者が首里城の正殿の所有者は、国だと紹介していたが、なぜ沖縄県ではなく国なのかという経緯は、改めて別の機会で取り上げて欲しいと思った。

- 6月1日(月)のストーリーズ ノーナレ「屋根裏のちばてつや」を見た。ナレーションがない中で、どのような番組になるか非常に興味があった。ちばさんが朝起きてどのような生活をしているかを丁寧に取材しており、本人が語る本音のことばがとて心響いた。何もナレーションがない、音だけの世界をうまく表現していた。戦後、中国からの引き揚げの途中に父親の親友の中国人に助けられたときに、隠れていた屋根裏部屋で弟たちのために絵を描き始めた、それが作品につながっているということが、ちばさんの語りとともにうまく紹介されていた。思い出を漫画に描かれていたが、最後に消しゴムでゴシゴシと消す音、鳥のさえずり、小さなため息、それが何のナレーションもなく、本当に静かな映像だったが、逆にさまざまなものが伝わってきた。81歳の方がこうやって、今も描き続けていることが本当にすばらしく、声援を送りたいと思った。ドキュメンタリーという番組のよさを再認識した。
- 6月6日(土)のいちおし!九州沖縄 フカイロ! #おおいた2030→「File. 1 これからの話をしよう。」を見た。大分県の高校生が、地域の課題をしっかりと認識して解決策を提案するだけではなく、イベントを企画して大人たちを巻き込むなど、具体的な行動に移している様子を見て大変頼もしいと感じた。具体的な事例を実際の映像で紹介してもらうことで、内容がよく理解できた。いわゆるSDGsをしっかりと実践している人たちが身近にいることを知ってよかった。このような取り組みが今後も持続可能かどうか、社会性は間違いなくあるが、その社会性と経済性が両立されているかどうかを知る意味でも、そういった事業の具体的な売り上げの推移や利益の推移を開示してもらえると、より理解が進んでよかったのではないかと思う。
- 6月6日(土)のNHKスペシャル「令和未来会議 危機をどう乗り越えるか? コロナ時代の“仕事論”」を見た。8人のコメンテーターが、リモート会議のように同時につながっており、一人一人が意見を言うだけでなく、意見を積み重ねていく建設的な議論を見ることができた。話の内容も、大企業の経営者、中小企業の経営者、そして女性経営者の違いが明らかで、リモート会議だからこそこのような多様な意見を引き出すことができたと思う。アナウンサーが一人で多様な意見を集約してお

り、非常に力を試される場所だと思った。グラフィックレコーダーの清水淳子さんがビジュアルで話をまとめるのは非常によいと思った。

- 6月10日(水)のガッテン!「掃除洗濯にマスクまで!暮らしを劇的に変えるたった1つのコツ」を見た。マスクのどちらが表なのか裏なのかという問題を取り上げていた。私もよく説明書きを見ていなかったが、3層構造になっていること、表面には水加工がされていて水やウイルスをはじく、内側は呼吸や汗で湿ってもその水分を吸収する構造になっているという、非常にシンプルな説明だったが、わかりやすくまとめられていた。今後も夏場に向けてマスクの問題や、飛まつの問題を取り上げて欲しい。

- 6月12日(金)の金サガ「避難の準備できていますか ~佐賀豪雨の教訓を生かす~」を見た。豪雨被害にあった住人のインタビューを複数取り上げており、そのインタビューから、住民のなかにある種の油断や防災意識の不十分さがあったということがわかった。丁寧な取材をしており、中でも佐賀県総合防災アドバイザーの瀧本浩一さんが的確で明快な説明をしており、大雨を迎える前のこの時期に適切な避難を訴える番組として最良のものだったと思う。災害と新型コロナウイルス、この両方の対策を考えた避難というのも、防災や消防の現場の声を取り入れながら、過不足なく説明していた。将来的には、ウイルス対策を講じた避難がうまくいくのか、あるいは何らかの課題が見えてくるのかを検証する番組も必要になってくるのではないかと思った。番組の最後で、「水害から命を守る」という公共メディアキャンペーンのウェブサイトアクセスする2次元バーコードが画面に表示されていたので、アクセスしてみたところ、南海トラフの津波想定や、赤ちゃんを守れる避難所、あるいは自宅が被災したときの生活再建のポイントなど、情報が盛りだくさんだった。欲しい情報を欲しい人が見に行く形式としてよいウェブサイトだと思った。

- 6月12日(金)のみやざき熱時間「どうする?コロナ禍の災害避難」を見た。県内の市町村にアンケートをとり取材を進めていたが、避難所に来た方を体調不良の人と健康な人に分けて避難してもらうことや、避難所運営の訓練で2メートルの間隔を開けて検温すると風雨の中で待ってもらわないといけないことなど、さまざまな課題があることが番組を見てわかった。安全と衛生を両立した避難所をいかにつくっていくのか、宮崎県の対策が進んでいることも番組を通してわかり、安心できた。また、行政に危機管理の専門家がいて、避難所の新型コロナウイルス対策がどうなっているのかということを検証しながら改善することになっていることを番組で知ることができ非常に勉強になった。

(NHK側)

新型コロナウイルス関係の番組をはじめとして、さまざまな意見をいただいたが、今後の番組作りに反映させていきたい。新型コロナウイルスについては、特に離島では、医療体制が弱いなどところがあり、警戒を強めているところがある。加えて、経済への影響は深刻な状態が続いている。このように地域に起きている影響をきめ細かく取材し今後も伝えていきたい。

- 6月14日(日)のNHKスペシャル 列島誕生 ジオ・ジャパン2(1)「列島大隆起」を見た。非常に勉強になり、とても癒やされる番組だった。最新の技術や研究データを紹介するだけではなく、CGなど多岐にわたる技術革新による番組で、NHKが目指している公共の価値にもある質の高い文化の創造を示した番組だったと思う。今後も非常に楽しみで、教育現場でも使うことができる番組だと感じた。また、キャスターの和久田麻由子さんの人柄が伝わってきて、とてもすがすがしくて歯切れがよく、この番組の魅力の一つであると思った。
- 大河ドラマ「麒麟(きりん)がくる」を見た。気になる点がある。女性がひざを立てているシーンがドラマに出てくるのだが、その時代に女性はひざを立てており、史実に基づいた演出だと聞いたこともある。しかし、大河ドラマはあくまでもドラマであり、内容もドラマとして制作している。そのため女性がひざを立てている姿には違和感がある。
- 「100分de名著 カント“純粹理性批判”」と、「アルベール・カミュ“ペスト”」を、NHKプラスやNHKオンデマンドで見た。新型コロナの感染拡大の影響で、テレビも再放送が多く、ニュースや番組も新型コロナばかりで、見ているだけで気がめいることがあった。そのような中で、「純粹理性批判」が取り上げられるということを知り興味を持った。新型コロナウイルスの流行で、多くの人が生きていること、また人間の本質について考え、内省的になっている。まさに、今ふさわしいテーマを取り上げた番組だと思った。理解を深めるためにテキストをじっくり読んでみようと思い、書店に行ったところ、「純粹理性批判」の隣にカミュの「ペスト」が平積みされていた。考えを深める参考書として、コンパクトでよい教材と思い、あわせて買い求めた。テレビの番組編成が、今なかなか悩ましい状況にある中で、NHKオンデマンドなどで過去の放送をじっくり見るよい機会だと思った。何らかのキャンペーンを行えば、NHKオンデマンドを新たに利用する人も増えるのではないだろうかと思った。

- 6月1日(月)の「赤い城 沖縄のころ～首里城 再建の願い～」(BS1 後9:00～9:40)を見た。「ちゅらさん」にも出演した俳優の国仲涼子さんとお笑いコンビガレッジセールのゴリさんがゲストだった。ゴリさんは、首里高校の卒業生でもあり、大変よいキャスティングだった。ただ細かいことになるが、龍潭のことを龍潭池と言ったり、守礼門のことを守礼の門と言ったりしていたので、固有名詞は正しく扱ってほしいと思った。番組では戦争と首里城の関係にも触れられており、日本軍の司令部があったため徹底的な攻撃に遭い、首里城も焼けてしまったという歴史が紹介されていた。首里城の再建が始まるのが2022年で、沖縄の本土復帰からちょうど50年の節目を迎える。今後も沖縄での取材や放送を継続し、機会があれば全国向けに発信してほしいと思う。

NHK福岡放送局
番組審議会事務局

2020年5月NHK九州沖縄地方放送番組審議会

5月のNHK九州沖縄地方放送番組審議会は、21日（木）、NHK福岡放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、2月の審議会での答申を受け、「2020年度九州沖縄地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「2020年度九州沖縄地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。続いて「2019年度九州沖縄地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について報告があった。次に、事前に視聴した「実感ドドド！熊本地震から4年 記憶と経験を未来へ」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、6月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	山元 紀子	（霧島高原ビール株式会社 代表取締役）
副委員長	富田 めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
委員	秋本 順子	（金属造形作家）
	乾 眞寛	（福岡大学 スポーツ科学部 教授）
	大鋸 あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン株式会社 取締役放送部長）
	楠田 喜隆	（株式会社 雲仙きのこ本舗 常務取締役）
	籠田 淳子	（有限会社 ゼムケンサービス 代表取締役）
	関西 剛康	（南九州大学 環境園芸学部 教授）
	田川 大介	（株式会社 西日本新聞社 編集局総務）
	古荘 貴敏	（株式会社 古荘本店 代表取締役社長）

（主な発言）

< 「2020年度九州沖縄地方向け地域放送番組編成計画」について >

- 編成計画について、東京オリンピック・パラリンピック大会に触れられているが、状況が大きく変わり、事業計画の見直しを迫られている事業者も多い中で、地域放送番組編成計画にも見直しがあってもいいと思う。

（NHK側）

東京オリンピック・パラリンピック大会は延期となり、流動的になっている。状況を見ながら本部とも調整して番組編成を考え

ていきたい。

- 字幕放送について、テレビに出演する人が新型コロナウイルスの感染拡大のためにマスクをしており、難聴者の方が口の動きが読めないとか、手話が分からない人も多いといった意見を聞く。マスクを着用するという新しい生活スタイルが、今後定着することを考えると、字幕のニーズというのがますます高まるのではないかと思うので、字幕放送を増やすとよいと思う。

(NHK側)

マスクをつけていると口元を見ることができないため、耳の不自由な方には分かりにくいというご意見は、視聴者からも寄せられている。記者会見の様態などを放送するときには、手話通訳を写すように努めている。継続して生字幕放送の充実にも取り組んでいきたい。

<実感ドドド！「熊本地震から4年 記憶と経験を未来へ」

(総合 4月3日(金)放送) について>

- 地震発生時の映像で番組が始まったが、4年が経過し、記憶が薄らいでいること思い知らされた。自分の言葉で伝えることができるのかと、最初は言葉に詰まっていた被災した大学生の辻さんが、震災を語り継ぐことの大切さに目覚め、自信にあふれる姿へ変化していく様子をうまく捉えており、時間をかけた取材だったのだと思う。また、入学して10日後に被害に遭った学生の梅崎さんが義足を装着するシーンは、衝撃的な映像だった。あの場にいたから、今の自分があるとまで語る自信にあふれた姿や笑顔は、私たちの心へ勇気を与えてくれ、未来へ希望を持つことができた。ゲストの映画監督の行定勲さんの言葉は心に残るものが多く、また、被災した大学のキャンパスからの放送は、今現在の熊本の姿を記録し、現状を強く理解してほしいという強い思いを感じた。メッセージ性の非常に強い番組だったと思う。
- 4年という時間の流れや長さを、ちょうど大学生の4年間という物差しに当ててこの番組を制作したことは、非常にすばらしい切り口だったと思う。同じ大学生の仲間が、入学して10日後に死亡するということが、若者にとってどれだけ大きな出来事であったのだろうか、片足を切断された学生の立場に立ち、どのような4年間だったのだろうかと思像した。けがの回復、手術ということだけではなく、大学への復学、単位を取得し進路を選択し、そして就職していく姿を見て、「記憶と経験を

未来へ」という番組タイトルの重さを感じた。非常に素晴らしい番組だった。

- 子どもと大人のはざまにある大学生が自然災害に翻弄されながらも自立していく姿が丁寧に描かれていて、感銘を受けた。ゲストの行定さんのコメントも非常にすばらしくてよかったが、25分という限られた放送時間の中では、学生の話をもっと聞いてみたかった。近年私たちは、自然災害に翻弄されているが、今は未知のウイルスにも翻弄されている。そして、犠牲になるのは感染者ばかりではなく、あらゆる大会やコンクールが中止となって、目標に向かってひたすら努力をしてきた中高生も、またウイルスの犠牲者であり、学校は再開となったが、中高生の割り切れない思いが渦を巻いていると感じる。片足を失った学生が、主治医の支えで立ち直ったというエピソードを見て、目標を失った生徒の運命を受け止める人の存在が必要なのだと感じた。自分自身もそのような存在になり役割を担えないかと考えさせられる、非常にメッセージ性の高い番組だった。
- オープニングを見て、地震発生時の被災者の不安な様子や当時の深刻さを感じた。学生の辻さんが、地震を語り継ぐ活動を先輩たちと同じ熱量でできるか分からないけれども、それ以上に伝えようと努力しているという言葉に感じるものがあった。そして、「気持ちが伝わるのが未来への力になる」という行定さんの言葉で、まさに将来へ不安を感じている学生が、不安だけではなく、少しでも希望を持とうとしている姿を感じることができた。自分自身も過去に被災した経験があり、災害時の対応力や復興への力、支援の輪やつながりを未来へ伝えていくべきだと感じた。
- 熊本地震から4年もたったのかと感じ、この4年間を思い起こすような気持ちで見た。卒業する先輩と、受け継いでいこうとする人をつないでいくシーンは非常に共感した。震災時には熊本の人たちに同情したり、心配したりしていたが、このシーンを見て、何か自分事とは思っていなかったのではないかと感じた。新型コロナウイルスに関しては、世界中の人々が自分事として捉えている。このような自分事としての経験が、今後さまざまな課題を乗り越える際の力になると思う。学生や熊本の人たちの経験が、今後の彼らの人生を明るくするのだと思う。よい番組だった。
- 学生の辻さんが地震の話を語り継いだり、阪神淡路大震災を経験した祖父母から伝えることの大切さを改めて教えられて力を得るなど、片足を失った学生が、岡野博史医師から励まし続けられたことによって立ち直ってきたのを見て、示唆してくれる人によって、若い人たちはどんどん前に進んでいけるのだということを思い知らされた。復興をみんなで伝え、つなげていくことの大切さを、行定さんがわかりや

すくまとめており、非常に印象に残った。よくまとまった番組だったと思う。

- 「実感ドドド！」は、今回の「熊本地震から4年」、先月の「SAND WARS～砂をめぐる争奪戦」と、いずれも見応えのある番組が続いている。九州沖縄の報道番組という色彩が鮮明になってきたと思う。熊本地震から4年という節目であり、本来であればメディア、テレビや新聞はもっと時間とスペースを割いて報じたいことと思うが、新型コロナウイルスの感染拡大によって押しやられてしまったところがあると思う。語り伝えること、記憶をつなぐ、記録を伝えていくという報道の役割について、強く印象づける番組になっていた。震災から4年を経て、学生にとっては一つのサイクルを終えた節目であったと思う。地震の翌年に入学した、震災を経験していない学生が、想像力を精いっぱい働かせ、先輩たちの苦しみや悲しみを共有しようとしている姿は、熊本地震への関心が薄れつつある今、視聴者に訴える力強いメッセージになったと思う。九州沖縄では、熊本地震に限らず、沖縄戦や長崎の原爆、各地への空襲はもとより、水俣病やカネミ油症をはじめとするさまざまな公害事件、炭鉱事故、また火山噴火、風水害等、数多くの自然災害がある。新型コロナウイルスをめぐる状況もそうだが、これらのことを語り伝えていく意味と責任について考えることができたよい番組だった。

- 若者にフォーカスを当てたのがとてもよかった。希望を感じさせるよい番組だった。辻さんのコメントの中で、言葉と言葉の間に長い間がある場面があったが、これをカットしないで、そのまま間を生かした編集がとても印象的でよかったと思う。悩みながら語り部の活動をされている辻さんが、本当に真剣に考えて、自分の言葉で何とか伝えようとしており、普段の活動の様子もそのシーンから想像することができた。足を失った学生がショッキングな出来事から一步踏み出そうというときに、誰かの支えがあるというのは大きいということが伝わってきた。行定さんのゲストへの起用も大変よかったと思う。大人からの一方的な若者へのコメントではなく、ひとりの人間として尊敬の念や郷土愛が感じられた。また、映画監督として映像の力を信じて、使命感を持って仕事をしていると感じた。VTRは時間をかけて取材し、丁寧に作られていると思った。番組冒頭の地震の際の実際の映像や、亡くなった方の数字にはインパクトがあり、引きつけられるものの、今回のような番組内容のスタートとして、あの始まり方が本当によかったのだろうかと思なった。取材VTRは時間をかけて丁寧に作られているのに、それをスタジオで見せていくときに、温度差のようなものを時々感じる。取材者の思いをキャスターに引き継ぐのは大変だと思うが、取材相手と向き合った気持ちの部分も放送時に生かしてほしい。とても見ごたえのあるよい番組だった。

- 実際に熊本地震を経験した立場からすると、当時大変な苦勞をした分、あえてそのことを思い返すことがなくなっていた。今、「記憶と経験を未来へ」というテーマで、番組が何を訴えようとしているのか、そこに興味を持って見た。冒頭、熊本地震を経験していない大学生が、地震の語り部の役割を引き継ごうと努力する様子は伝わってきたが、何のためにそれに取り組むかということが明確に伝わってこなかった。ただ、その後の行定さんの話や、解説を聞くことで、熊本地震のような災害を経験したことがない人でも、語り部から話を聞いたり、残された映像を見たりすることによって、その状況に自分が直面したときのことを想像し、自分だったらどのように行動すべきかを考えるきっかけとなる。最も心を打たれたのは、地震で右足を失うという壮絶な体験をした学生が、いろいろな人たちの支えやさまざまな挑戦を通して、あの体験があったからこそ、今の自分があると、前向きに捉えて歩んでいる姿である。今まさに、多くの人が厳しい状況に置かれているので、それを一緒に乗り越えようというメッセージにもなっていると感じた。大変勇気づけられるよい番組だったと思う。

- 4年間の記憶を呼び戻す番組だった。記憶をいかに継いで、未来に生かせるかを、視聴者に伝えるすばらしい番組だったと思う。熊本出身の行定さんの思いも伝わり、その言葉が全体を総括していたと思う。地震を体験していない辻さんは、言葉に詰まりながらも語り継いでいくことの大切さを語っており、今後も続けていくのではないだろうかと感じた。つぶれた寮の中で一命を取り留めた学生は、右足を失ったの大学の4年間は壮絶だったと思う。過酷な状況の中で、夢をあきらめず、前に一步一步踏み出せたのは、岡野医師との出会いがあったからだと思うが、その当時から彼の姿を追い続けてきたNHKの、記録としての必要性も感じた。未来への警鐘を鳴らし続けるためにも、熊本地震の番組、この大学の学生と地域住民の今後の活動を、これからも放送してほしいと思った。

(NHK側)

来年春は、東日本大震災から10年、そして熊本地震から5年、新型コロナウイルスの感染拡大で緊急事態宣言が発出されて1年という大きな節目がいくつもある。何を伝え、何を検証していくべきかを、これからも考えていきたいと思う。

(NHK側)

3月、4月は、熊本県知事選挙、新型コロナウイルスへの対応があったが、4年が経過した熊本地震についてもさまざまな工夫をして伝えてきた。新型コロナウイルスへの対応でもそうだが、

九州沖縄一体となって取り組んでいくことがNHKの力になると
思っている。

<放送番組一般について>

- 4月3日(金)の時論公論「文化・芸術の灯を消さないために」を見た。文化・芸術に携わっている人々へのアンケートや実態調査の結果がとても分かりやすく表示されており、集中して見ることができた。アメリカ、イギリス、ドイツの芸術への支援の事例を数字で表し、比較することで、日本の支援の水準の低さを実感した。今後、新型コロナウイルスの収束後、結果的に芸術への支援がどのようになったのか、改めて伝えてほしいと思った。
- いろどりOITAを見た。4月20日(月)から「“新型コロナ” 乗り切るために」という、自粛生活に大切な情報を伝えるコーナーが新設された。先が見えない私たちへエールを送るニュース番組だと思い、身近に感じた。
- 5月9日(土)のNHKスペシャル「ふり向かずに 前へ 池江璃花子 19歳」を見た。この時期に、池江さんの復活や再出発の映像が流れ、番組の内容に深く考えさせられた。私はスポーツの力というのを信じている。スポーツができない状況になったとき、自分たちはどのような力を発揮できるのか、スポーツのあり方やスポーツの力というものを、失って初めて問いただし、考え直す時間になっている。池江さんは、大学に入学してすぐに白血病を発症し、10か月間の入院生活を送った。アスリートとして頂点にあった彼女が、この事実を受け止めることが、どれだけつらかったかということ、とても重く感じた。現在、新型コロナウイルスで活動ができないスポーツ選手、アスリートは数多くいる。改めてスポーツの力をどのように表現するのかということ、池江さんのすばらしい生きる力、あるいは成長を目指す力をこの番組を通じて感じた。番組を見た同世代の人たちも、多くのことを感じ取ったのではないかと思う。
- 5月9日(土)のNHKスペシャル「ふり向かずに 前へ 池江璃花子 19歳」を見た。ニュースで病気のことを知り、ショックを受けた。それから約400日がたち、プールに入る場面などを見て、本当によかったと思った。コロナ禍において、ネガティブな報道やマイナスの情報が多い中、希望をもって見ることができた。池江さんの言葉で印象的だったのが、同じ境遇や同じ病気で苦しんでいる方々に勇気を与えたい、これは自分の使命だという言葉に力強さを感じた。非常にいい番組だと

思う。

- 5月14日(木)のクローズアップ現代+「観光復活へ 知られざるシナリオ ～トップたちの一手～」を見た。新型コロナウイルスの流行が過ぎ去った後を見据えた観光戦略を前向きに描くということで、いずれもインバウンド頼りだった発想を転換し、地域が一体となり、地に足のついた戦略で活路を見いだそうとするユニークなよい番組だった。気になった点は、経営者として、従業員の生活に責任を負っているホテルリゾート代表のコメントに対して、大阪観光局局長のコメントは、少し絵に描いた餅のように感じ、ふたりの間には温度差があったようにも感じた。他の人選があってもよかったのではないかと思った。いずれにせよ、観光業界のみならず、新型コロナウイルスの前と後とでは、働き方をはじめ生活スタイルが大きく変わっていく。企業も行政も教育も、これまでの常識や成功体験、習慣は通用しなくなっていくと思う。あらゆる人たちに対して視野の広がりや刺激を与えてくれる番組だったと思う。
- 5月15日(金)のニュースブリッジ北九州で、「集団感染発生の病院 その時何が」というニュース企画を見た。病院で集団感染が発生し、厚生労働省のクラスター対策班が入ったということは知っていたが、実際何が起きたのかという正確な情報を視聴者は知らなかったもので、よい取材だったと思う。厳しい状況から再開までを報じており、食い入るように見た。キャスターが、「過度な心配から保育園がその病院の子どもを受け入れないということが起きている」と言っていたが、過度な心配からという表現が非常に気になった。誰でも心配はするものなので、正しい情報を分かりやすく知らせることが大切であると思う。今後もNHKの報道には期待したい。
- 5月15日(金)のくまもとの風「阿蘇 彩りの大草原～炎で始まる四季～」を見た。番組冒頭の阿蘇五岳と過去の映像から始まり、番組を通して四季折々の映像美に圧倒された。特に、野焼きの激しい炎を近くで撮影している場面や、阿蘇カルデラの斜面を雲が静かに流れ落ちていく様子、そして、画面いっぱい広がるススキの樹氷など、見たことがない映像も多く、高い撮影技術に驚かされた。穏やかな語り口の本仮屋ユイカさんのナレーションも合っており、野焼きの意味や阿蘇にまつわる神話など、知らなかった知識もたくさん得ることができた。25分という短い時間だったが、心が癒やされる大変満足感が得られる番組だった。
- 5月15日(金)の金サガ「新型コロナウイルス 専門家と考える佐賀のこれから」を見た。テーマも構成も内容もよかった。緊急事態宣言が一部解除された翌日の放送で、時宜を得た放送だったと思う。また、このタイミングで知事が出演したこと

で、県の動きを知りたいという県民の思いにも応えていた。視聴者の質問に専門家が答える場面では、質問の選び方もよかったと思う。売り上げが落ち込んでいる事業者へのインタビューがあったが、今現在の課題を伝えるという点で、生放送ならではの演出だったと思う。現場のアナウンサーのリポートも安定しており、安心して見ることができた。ただ、内容が盛りだくさんで、25分という放送時間では短い印象だった。もう少し余裕を持たせて、視聴者からの質問に答える時間を増やし、知事も触れた再陽性患者の情報を入れてほしかった。新型コロナウイルスの報道は首都圏を中心とした報道が多いと思うが、佐賀の実情をしっかりとまとめて、今何を伝えて、どんな疑問に答えるべきかという番組を収束までぜひ継続してほしいと思う。近々の課題としては、災害避難所と感染予防という観点で、大雨のシーズンを前に、避難に関する番組も制作してほしいと思う。

番組では、店のオーナーのインタビューシーンで、店名が出ていたが、NHKでは店名を出さないときも多いと思う。名前を出す、出さないについて、どのような基準があるのか。

(NHK側)

番組やニュースの中で固有名詞を出すかどうかについては、それぞれのケースごとに判断している。ニュースや報道番組では、情報の重要な要素なので、出すのが原則であると考えている。一方で、会社名や店舗名、商品名を出すことにより、PRにつながる場合、あるいは風評被害につながる恐れのある場合は出すことを控え、必要最小限にとどめるという判断もある。会社名や店舗名などを出すことが、視聴者の理解を深めることにつながるかどうかを、その都度判断しながら伝えている。

- 連続テレビ小説「エール」を見た。新型コロナウイルスによる自粛生活をしていると、古関裕而さんが作曲した数々の名曲や応援歌をつい歌ってしまうことがある。また今回、新型コロナウイルスによって亡くなられたコメディアン志村けんさんの演技を見ることができて感無量だった。このドラマは、歴史に残るドラマの一つになるのではないかと思う。

- 4月26日(日)の猫のしっぽ カエルの手 スペシャル「雨の中でも踊るのが人生」を見た。何度見てもよいと思う、見応えのある番組だった。このコロナ禍にさまざまな情報が入ってくる中、とてもほっとする時間だった。ベニシアさんの暮らし方を、番組が12年間にわたり取材してきたのもすばらしく、カメラをあまり意識していない彼女や、家族の方々、近所の皆さんを見ていると、誠実な取材姿勢も感じられ

た。音楽や柔らかなナレーション、ベニシアさんの英語のポエムなど、番組全体が、まるで栄養のある食べ物のように感じた。「ステイホーム」の中で自分の生活を見つめ直していると、ベニシアさんのように、しっかりと掃除をし、料理をして、四季をめでて、地域の人々と仲よくするという暮らしを長い間実践している姿に感動を覚えた。

- 新型コロナウイルスの情報を知るのに、NHKのニュース・防災アプリが非常に役立った。国や自治体などの会見がライブで配信されており、リアルタイムの情報を得ることができた。コンパクトに情報をまとめて、しっかりと伝える番組も必要だが、いち早く情報を得たい場合や、生の情報を自分で取りに行く場合など、リアルタイムの情報を得ることができるNHKのニュース・防災アプリは大変有効だった。今後、自分たちが新型コロナウイルスにどのように対応していくかを考える際の情報源として役立つと思う。
- 沖縄放送局ホームページには、全国の新型コロナウイルスの特設サイトとは別に、独自の特設サイトも設けられており、さまざまな情報が載っている。県民に対して有益な情報提供であり、大変ありがたく思う。

NHK福岡放送局
番組審議会事務局

4月九州沖縄地方放送番組審議会休会のお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、4月16日(木)に予定していた九州沖縄地方放送番組審議会は休会となりました。

NHK福岡拠点放送局 番組審議会事務局